Akita University

秋　田　大　学
教養基礎教育研究年報
87 － 97　（2014）

大学生の「死」に対する意識の経年変化と今後のデス・エデュケーションのあり方について（1）

渡　部　明　子・森　　和　彦

Tracing changes in perception about ‘death’ and its implications for death education — The case of students at higher education in Japan

Akiko WATANABE, Kazuhiko MORI

要約

近年，多くの大学でデス・エデュケーション―死について学ぶ授業が行われるようになり，さまざまな分野で死についての研究が進んでいる。それとともに受講者の死に対する不安や恐怖の程度に変化は生じているのだろうか。本研究は，大学のある授業の一環として行われてきたデス･エデュケーションの受講者を対象に，死について学ぶことへの不安や恐怖感の度合いを，質問紙による調査によって年度別にまとめて比較し，その経年変化を考察した。また，死に関するワークと授業を受けての感想をもとに，今後のデス・エデュケーションのあり方についても考察した。

キーワード：デス・エデュケーション，「死」に対する不安，経年変化

Ⅰ．はじめに

本学の「生涯発達心理学Ⅱ」の授業の一環として「デス・エデュケーション―死について学ぶとは」をテーマに，２回連続の授業を実施してから10年が経過した。生と死をテーマとする授業は，1980年代から90年代にかけて医学や看護教育，宗教学といった限られた分野を中心に行われてきたが，次第に生涯教育や社会人教育，そして学校教育でも取り上げられるようになった。さらには精神医学，生命倫理，ターミナルケア，グリーフケア，高度医療と死生観との関連など，あらゆる分野に導入されている。

その背景には，医学・医療技術の進歩により，治癒・回復の希望や可能性が広がる中で，患者は長期間にわたって「死」と対峙するという現実がある。さらに，高齢者の介護・看護の問題とそれに伴う不安感や孤独感も挙げられる。また，年間３万人を超える自殺者，世界中で多くの命が奪われたり，危険にさらされる紛争，テロ事件，事故，災害などの生死に関わる報道が，通信技術の進歩によってより即座にまたリアルに伝えられ，死の恐怖感も強調されている。それとは逆に「死」をテーマとして学び，考え，表現することへの抵抗感や障壁は急速に取り払われてきた。

人生の最大の危機である「死」に対する意識は，世の中の移り変わりや社会情勢の変化，実用機器などの進歩とともに変わっていくものなのだろうか。もしも変わるとすれば，デス･エデュケーションもその流れに沿った手段や方法を講じる必要があるのではないだろうか。

Ⅱ．問題

本研究は，時代の流れや風潮および自然災害，世間を騒がす事件や事故の有無などによって，デス・エデュケーションを受講した学生の反応に違いあるいは変化が見られるのかどうかを，質問紙調査，ワーク，感想に基づいて分析し，今後のデス・エデュケーションの方向性や目標を探ることを目的として行ったものである。

Akita University

Ⅲ．方法

１）実施内容

デス・エデュケーションの授業は，２週連続の形式で行われている。第１回目の授業の最初に，死についてのイメージや死に対する不安や恐怖の程度，死別体験の有無等について質問紙に回答してもらい，授業では，「一人称の死」を中心に，Ⅰ．死の意義，Ⅱ．デス・エデュケーションの意義と目標，Ⅲ．死の受容について講義とテーマに関連のあるビデオの視聴を行い，最後に「自分が余命宣告を受けたら，何をしたいか」というテーマに関する記述を求めている。第２回目の授業では，「二人称，三人称の死」を中心に，Ⅰ．悲嘆のプロセス，Ⅱ．悲嘆要因と悲嘆反応，Ⅲ，死別体験者への対応の仕方について講義とビデオ視聴，最後に講義に対する感想や意見を記述してもらった。

２）調査対象と手続き

2004 年度から 2008 年度に本学教育文化学部に在籍し，「生涯発達心理学Ⅱ」の授業の受講者２～４年生を対象に，死に対するイメージ，不安の程度や態度プロフィールの測定及び個人の死別体験に関するアンケート等による調査を実施した。本研究では現在まで調査は続けられているが，本稿ではその前半部分を取り扱う。時代背景を考慮するために，５年を一区切りとして受講者のデス・エデュケーションに対する印象や意見，感想などをまとめ，比較するためである。本稿執筆時では 2013 年度のデータを取っていないので，後半部分は続報による。この両稿の分析と比較検討の上で，2014 年以降の授業の内容に，結果分析に即した質問紙を作成したいと考えたからである。調査時の有効回答数，回答者の平均年齢及び最低年齢と最高年齢は表１の通りである。質問紙は当日の授業開始前に配付し，授業直後に回収した。質問紙は渡部の修士論文（2000）および渡部・森（2003）に記載したものと同様である。

表１　有効回答数と年齢データ

年度	性別	有効回答数	平均年齢	最低年齢	最高年齢	標準偏差
2004	男	48	21.6	19	61	5.92
	女	117	21.0	19	24	0.81
2005	男	60	21.4	19	29	2.70
	女	119	20.9	19	35	1.54
2006	男	54	20.9	19	24	0.88
	女	104	21.3	19	21	0.62
2007	男	42	20.9	19	57	5.87
	女	81	20.2	18	23	1.92
2008	男	78	19.6	18	36	2.56
	女	94	20.1	18	22	1.13

３）質問紙による調査

①質問紙１【死の意味微分測定】：死に対する意味尺度をスケール上に回答する Kalish（1985）の意味微分法（Semantic Differential Technique）を用いた。７つの目盛りに分けたスケールの左端と右端にポジティブとネガティブの意味を表す形容詞や形容動詞を配置しておき，２つの相対的なことばのどちらに自分自身の死に対するイメージがより近いと感じるかを，スケールの目盛りを○で囲む記入方式によって回答を求めた。このスケールは全部で 18 項目ある。

②質問紙２【死への不安測定票】DAQ（Death Anxiety Questionnaire）：Conte ら（1982）による死への不安の測定調査研究において信頼性が確認された DAQ が使用された。この質問紙は自分自身の死についての不安に焦点を当てた全 15 項目の質問に対して「はい」，「いいえ」，「どちらともいえない」，の３件法で回答を求めた。

③質問紙３【死に対する態度調査票】DAP（Death Attitude Profile）：死に対する態度プロフィールを測定するための質問項目で，Gesser ら（1987-88）による発達段階に伴う死の受容に対しての態度調査で用いられた DAP が使用された。全 18 項目を「１：そう思う，２：ある程度そう思う，３：どちらともいえない，４：あまりそう思わない，５：そう思わない」の５件法で回答を求めた。

④質問紙４【個人の体験・背景調査】：(1) 自分自身が死の恐怖を感じるような体験をしたことがあるかどうか，(2) 自分以外の誰かの臨終に直面した経験の有無，(3) 親しい人との死別体験の有無，(4) 死別体験が有る場合はその関係（父，母，祖父母，兄弟姉妹，それ以外の親族，友人，その他）の明記，(5) 特定の宗教を信仰しているかどうかという全５項目について回答を求めた。

結果の分析にあたっては，３種の質問紙それぞれの各項目について，2004 年度から 2008 年度の間に有意な差がみられるかどうかを検証するために一元配置の分散分析を行った。有意差が見られた項目については，さらにどの年とどの年の間に有意差が見られたのかを検証するために

Akita University

Bonferoni の多重比較を行った。

4）ビデオ視聴

2004 年度から 2007 年度は，授業開始当初から視聴していた「ガンと闘ったジャーナリスト：千葉敦子さんの死（1987，NHK）」と，神奈川県の小学校校長が病気と闘いながら亡くなる直前まで行っていた「いのちの授業」の録画を使用した。前者は，乳ガンのため，米国の自宅で最期を迎えたジャーナリスト千葉敦子さんの講演の様子や，彼女の家族や親しかった知人による彼女の生前の思い出を語ったものである。千葉さんは，日本におけるデス・エデュケーションのパイオニア的存在であるアルフォンス・デーケン氏の親しい友人であったが，若くして乳がんを発症し，再発で余命わずかと宣告されながらも，病気と闘いながら執筆や講演活動を続けた。当時の日本では病名告知や患者自身による治療の選択が皆無に等しかったため，米国のホスピスで自らの希望する治療やケアを受けることを決意した。自身が米国での治療や看護の様子等の体験を各地で語ることにより，日本におけるガンの告知（インフォームド・コンセント），延命措置を含めた治療法の選択など，患者の意思を優先する医療の発展に大きく貢献した。

「いのちの授業」は，神奈川県の浜之郷小学校で初代校長として奉職していた大瀬敏昭先生が，３年生から６年生の児童を対象に，死の直前まで行った授業の DVD である。1998 年に開校した新設校の初代校長として就任した先生は翌年にがんを宣告され胃の全摘手術を受けた。術後約１ヶ月で職場復帰を果たしたが，転移・再発し，余命宣告を受けた。2004 年１月に亡くなる直前まで２年間，絵本の読み聞かせや過去に起きた災害の犠牲になった人々の話とその後の出来事を通して，生徒に生命と真剣に向き合い考える授業を 18 回に亘って行った。

2008 年度は，関西を中心にジャズシンガーとして活動していた石野見幸さんが，胃がんの再発・転移のため闘病生活を続ける中で，自らのブログにその記録を綴ったものを視聴した。苦しい治療を続ける中，2007 年に 35 歳の若さで亡くなる直前まで，ライブで歌うという夢を追い続けたその姿は，同じ病気や難病に苦しむ人や大切な人を失った人などから多くの支持を得た。

5）ワークについて

第１回目の授業の最後に，「もしも自分があと半年しか生きられないとしたら，何をしたいか」について，自由に記述するワークを行ってきた。書式や分量などは定めず，授業の残りの時間で考え，質問紙の回答と共に提出してもらった。

6）リアクションペーパーについて

毎年度，二回目の授業の後に意見や感想を自由に記述してもらった。

7）授業実施時期（調査期間）と調査期間中におけるインパクトの高い死に関するニュース

授業の実施時期については，先述のとおり毎年ほぼ同時期の冬休み明け（１月中旬～下旬）に行われることが多いが，授業の進度や期末試験の日程等の関係で多少異なることがある。各年度の実施時期は下記の通りであった。

2004 年度：１回目 2005 年１月 11 日，２回目同年１月 18 日 // 2005 年度：１回目 2005 年 12 月 20 日，２回目 2006 年１月 10 日 // 2006 年度：１回目 2007 年１月 16 日，２回目 2007 年１月 23 日 // 2007 年度：１回目 2008 年１月 15 日，２回目 2008 年１月 22 日 // 2008 年度：１回目 2009 年１月 13 日，２回目 2009 年１月 20 日

Ⅳ．結果

1）質問紙

①質問１．死の意味微分測定

経年変化においては，項目 10（F（4，793）＝2.39, p = .05）および 18（F（4, 793）=2.60, p=.04）に有意差が見られた。Bonferoni の多重比較を行った結果，項目 10 では，2005 年度と 2006 年度の間に有意差（平均の差＝.570 の増加，p=.03）が認められた（表２）。また，すべての年度を通じて，死に対するイメージがポジティブまたはネガティブな度合いの高い項目は，２「動的な―静的な」，９「薄っぺらな―深みのある」, 11「暗い―明るい」，12「親しみやすい―親しみにくい」，14「冷たい―暖かい」，16「軽い―重い」，17「浅い―深い」，18「永遠の――時的な」の７項目であった。

②質問２．【DAQ】死への不安と個人の体験との

Akita University

表２　測定した死に対するイメージの経年変化（質問紙１*SD* 法）

			2004		2005		2006		2007		2008				
	1	7	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	*F*	*df*	*sig.*
1	きびしい	やさしい	2.57	1.34	2.66	1.28	2.74	1.32	2.72	1.43	2.70	1.15	0.42	4, 796	0.80
2	動的な	静的な	5.44	1.57	5.41	1.31	5.69	1.32	5.34	1.44	1.41	1.42	1.32	4,795	0.26
3	現実的	幻想的な	2.96	1.78	2.92	1.65	2.91	1.78	3.21	1.89	2.85	1.63	0.86	4,795	0.49
4	意味有	意味無	2.80	1.52	2.68	1.50	2.94	1.81	2.59	1.41	2.76	1.48	1.03	4,794	0.39
5	美しい	みにくい	4.02	0.99	4.02	0.06	3.96	0.07	3.80	0.08	3.88	0.07	1.71	4,794	0.14
6	かたい	柔らかい	3.34	1.36	3.49	1.23	3.49	1.30	3.24	1.30	3.50	1.24	1.13	4,794	0.34
7	のんびり	はりつめた	5.02	1.29	4.97	1.37	4.74	1.42	4.96	1.38	4.90	1.39	1.01	4,791	0.40
8	狭い	広い	4.38	1.61	4.47	1.50	4.60	1.51	4.50	1.59	4.62	1.53	0.67	4,794	0.61
9	薄っぺら	深みのある	5.42	1.35	5.59	1.20	5.58	1.37	5.72	1.32	5.56	1.32	0.96	4,794	0.43
10	**複雑な**	**単純な**	**3.37**	**1.69**	**2.96**	**1.70**	**3.53**	**1.84**	**3.26**	**1.93**	**3.27**	**1.71**	**2.39**	**4,793**	**0.05**
11	暗い	明るい	2.23	1.29	2.19	1.12	2.27	1.31	2.54	1.33	2.33	1.16	1.63	4,792	0.16
12	親しみ易	親しみ難	5.55	1.37	5.78	1.35	5.79	1.37	5.76	1.26	5.82	1..14	1.21	4,792	0.31
13	強い	弱い	3.39	1.57	3.46	1.49	3.31	1.68	3.41	1.48	3.47	1.57	0.27	4,791	0.90
14	つめたい	あたたか	2.18	1.12	2.22	1.18	2.26	1.24	2.33	1.35	2.43	1.28	1.06	4,794	0.38
15	不安定な	安定した	3.33	1.71	3.26	1.61	3.57	1.67	3.38	1.77	3.40	1.55	0.77	4,793	0.54
16	軽い	重い	5.99	1.29	6.11	1.08	5.86	1.29	5.98	1.21	6.03	1.17	0.96	4,794	0.43
17	浅い	深い	5.78	1.30	5.99	1.16	5.76	1.23	6.03	1.09	5.92	1.09	1.67	4,794	0.16
18	**永遠の**	**一時的な**	**2.36**	**1.54**	**2.16**	**1.40**	**1.93**	**1.43**	**2.28**	**1.67**	**2.41**	**1.61**	**2.60**	**4,793**	**0.04**

表３　死への不安の測定結果（質問紙２ Death Anxiety Questionnaire）

		2004		2005		2006		2007		2008				
	1	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*F*	*df*	*sig.*
1	死を怖れている	2.48	0.77	2.48	2.02	2.37	0.74	2.52	0.69	2.56	0.63	1.46	4.79	0.00
2	全てを成し遂げる前に死ぬのではないかと悩んだことがある	2.48	0.67	2.47	0.69	2.35	0.86	2.46	0.82	2.33	0.85	1.46	4.79	0.21
3	死の前に長期病気に苦しむのではないかと不安	2.36	0.80	2.28	0.79	2.37	0.81	2.28	0.86	2.25	0.84	2.58	4.79	0.04
4	死ぬ時苦しむ姿を他人に見られてしまうかもしれないと考え動揺	1.82	0.77	1.86	0.81	1.71	0.79	1.74	0.82	1.75	0.84	23.74	4.79	0.00
5	死ぬことは苦しいことではないかと不安	2.40	0.81	2.45	0.85	2.41	0.80	2.29	0.80	2.45	0.72	23.97	4.79	0.00
6	自分が死ぬ時一番親しい人がそばにいないのではないか心配だ	2.13	0.79	2.23	0.74	2.10	0.79	2.26	0.84	2.16	0.85	5.94	4.79	0.00
7	自分が一人ぼっちで死ぬのではないかと不安だ	2.06	0.81	2.10	0.85	1.92	0.85	2.02	0.83	2.01	0.87	3.47	4.79	0.01
8	死ぬ時に自制心を失ってしまうのではないかと悩むことがある	1.74	0.83	1.67	0.84	1.57	0.76	1.70	0.81	1.59	0.75	17.57	4.79	0.00
9	自分が死ぬ時、出費が他の人の重荷になるのではないかと不安だ	2.00	0.78	1.94	0.76	1.73	0.82	1.97	0.88	2.04	0.88	6.52	4.79	0.00
10	死後指示や遺言が守られないのではないか心配	1.49	0.83	1.44	0.81	1.25	0.52	1.42	0.60	1.40	0.67	39.53	4.79	0.00
11	自分が本当に死ぬ前に埋葬されてしまうのではないかと不安だ	1.31	0.74	1.26	0.65	1.24	0.54	1.28	0.56	1.24	0.55	6.15	4.79	0.00
12	愛するものを残して死んでいくと考え悩むことがある	2.29	0.59	2.22	0.52	2.21	0.83	2.20	0.88	2.19	0.81	77.92	4.79	0.00
13	周りの人が死後自分を思い出してくれないのではないか心配	1.79	0.79	1.94	0.79	1.66	0.81	1.83	0.83	1.68	0.81	23.42	4.79	0.00
14	死ぬことによって自分が永久にいなくなってしまうと悩むことがある	1.73	0.82	1.91	0.85	1.70	0.82	1.75	0.85	1.74	0.87	2.34	4.79	0.05
15	死後にどんな期待を持ってよいのかわからないと心配	1.81	0.82	1.96	0.89	1.71	0.78	2.00	0.84	1.81	0.85	3.16	4.79	0.01

Akita University

関係質問紙２では，すべての年度を通じて「いいえ」の回答傾向が高かったのは11で，「はい」の肯定傾向が高かったのは１，２，５であった。表３が示す通り，２以外の項目すべてに有意差がみられた。各年代どうしの多重比較は紙面が限られており，すべてを示すことはできないが，各年代の平均に各項目の傾向がよく表れている（表４）。すなわち，2004年度と2005年度との間に差が見られず，また2006年度，2007年度，2008年度の間にも有意差が見られない。一方，2004年度・2005年度と，2006年度・2007年度・2008年度の間には有意差が認められる。つまり，このデータを撮り始めた2004年度から2008年度の間に限ってみると，2005年度までの年代と2006年度からの年代の間には，何らかの有意な変化が認められるということである。

表４　死への不安の測定結果における各年代平均の多重比較

	2005		2006		2007		2008	
	平均の差	*Sig.*	平均の差	*Sig.*	平均の差	*Sig.*	平均の差	*Sig.*
2004	-.02	1.00	1.33	.00	1.24	.00	1.27	.00
2005			1.35	.00	1.26	.00	1.29	.00
2006					-.10	.47	-.06	1.00
2007							.03	1.00

注：Bonferroniの値および有意水準（*Sig.*）

③質問３【DAP】死に対する態度と個人の体験との関係

表５に示す通り，質問紙３でも総体的には変化が見られなかった。項目１，６，18，21には有意差が見られたが，多重比較で検証したところ，わずかに次の年代間に有意差が見られるだけであった。項目６の2005年度と2006年度（差＝.411，p=.022），項目18の2005年度と2006年度（差＝.57，p=.000），2005年度と2007年度（差＝.39，p=.034）である。これらは質問紙３のなかではむしろ例外的な傾向であるが，質問紙２の結果とあわせてみると，やはり2005年度と2006年度の間に変化が見られているところが興味深い。なお，すべての年度を通じて「いいえ」の回答傾向が高かったのは９，11，12，15で，「はい」の肯定傾向が高かったのは７であった。

表５ 死に対する態度（質問紙３ Death Attitude Profile）

		2004		2005		2006		2007		2008				
	1	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	*F*	*df*	*sig.*
1	**死は永遠の至福への通路**	**3.97**	**0.98**	**3.99**	**0.86**	**3.76**	**1.02**	**3.67**	**1.00**	**3.89**	**0.99**	**2.862**	**4,795**	**0.023**
2	生きていることに疲れている	3.57	1.22	3.51	1.19	3.58	1.28	3.52	1.17	3.68	1.15	0.543	4,796	0.704
3	むごい死を迎えるか心配	3.42	1.13	3.34	1.07	3.54	1.17	3.52	1.16	3.44	2.00	0.566	4,796	0.688
4	死は人生というプロセスの一部	3.28	1.28	3.34	1.25	3.13	1.36	3.04	1.30	3.09	1.30	1.607	4,794	0.171
5	死を怖れもせず喜んで迎えもしない	3.13	1.24	3.31	1.23	3.10	1.29	3.10	1.30	3.11	1.26	0.901	4,795	0.463
6	**長生きに目的も意味も見出せない**	**3.62**	**1.26**	**3.77**	**1.14**	**3.36**	**1.30**	**3.69**	**1.20**	**3.65**	**1.24**	**2.586**	**4,796**	**0.036**
7	死が苦痛を伴うのではないかと不安	2.33	1.15	2.24	1.10	2.28	1.19	2.34	1.01	2.31	1.14	0.174	4,796	0.952
8	死という事実に直面することは難しい	2.73	1.18	2.81	1.21	2.80	1.25	2.78	1.24	2.76	1.20	0.125	4,796	0.973
9	死を恐れる気持ちがわからない	4.07	1.06	4.03	1.01	3.97	1.09	4.14	0.96	3.98	1.05	0.649	4,796	0.628
10	早死にするのではないかと心配	3.04	1.10	3.15	1.22	3.17	1.30	3.00	1.24	3.16	1.23	0.597	4,793	0.665
11	死後の世界が楽しみ	4.15	1.08	4.21	0.96	4.15	1.18	3.98	1.12	4.25	0.99	1.347	4,795	0.251
12	この世には楽しみが何もない	4.49	0.83	4.45	0.85	4.50	0.76	4.56	0.71	4.49	0.79	0.367	4,796	0.832
13	死後天国へ行くと信じている	3.46	1.13	3.48	1.12	3.42	1.15	3.45	1.10	3.48	1.11	0.089	4,796	0.986
14	ジワジワと死んでいくと怖れている	2.63	1.27	2.76	1.20	2.80	1.21	2.60	1.18	2.59	1.24	0.985	4,795	0.415
15	死は日常他の出来事と違いはない	4.31	0.95	4.16	1.07	4.20	1.09	4.22	1.04	4.24	0.99	0.643	4,796	0.632
16	皆死ぬ運命にあると諦めている	2.63	1.22	2.77	1.25	2.58	1.27	2.48	1.18	2.58	1.25	1.122	4,795	0.345
17	人生の短さを思うと心が乱れる	3.60	1.17	3.69	1.99	3.92	1.06	3.57	1.26	3.67	1.16	1.521	4,795	0.194
18	**死は痛みからの解放でもある**	**2.91**	**1.08**	**3.23**	**1.17**	**2.66**	**1.18**	**2.84**	**1.05**	**3.07**	**1.17**	**6.114**	**4,796**	**0.000**
19	天国はこの世より良い場所である	3.56	1.04	3.54	1.07	3.55	1.04	3.41	1.02	3.58	1.08	0.487	4,794	0.746
20	自分自身の死を思うと不安になる	2.45	1.27	2.47	1.25	2.58	1.27	2.48	1.28	2.65	1.26	0.827	4,796	0.508
21	**死はこの世の苦しみからの救い**	**3.73**	**1.03**	**3.74**	**1.04**	**3.65**	**0.97**	**3.46**	**1.07**	**3.77**	**1.08**	**2.076**	**4,796**	**0.082**

Akita University

表６　死の体験の有無等

	2004	2005	2006	2007	2008
(1)自分が死の危険を感じるような経験の有無					
全回答者数(人)	168	180	158	123	172
「ある」の回答数(人)	36	46	26	28	32
割　合 (%)	21.4	25.6	16.5	22.8	18.6
(2)自分以外の人の死を目撃・経験の有無					
全回答者数(人)	168	180	158	123	172
「ある」の回答数(人)	113	125	114	89	115
割　合 (%)	67.3	69.4	72.2	72.3	66.9
(3)最近5年間に身近な人を亡くした経験の有無					
全回答者数(人)	168	180	158	123	172
「ある」の回答数(人)	106	115	95	74	100
割　合 (%)	63.1	63.9	60.1	60.1	58.1
(4)信仰している宗教の有無					
全回答者数(人)	168	180	158	123	172
「ある」の回答数(人)	23	21	19	24	25
割　合 (%)	13.7	11.7	12.0	19.5	13.4

表７　(3)（表６の（3)）で「ある」と回答した人について
亡くなった方と回答者との関係

	a	b	c	d	e	f	g	計
2004	2	2	49	0	43	22	16	134
	1.5	1.5	36.6		32.1	16.4	11.9	
2005	2	5	63	2	37	20	25	154
	1.3	3.2	40.9	1.3	24	13.1	16.2	
2006	0	2	46	0	38	21	9	116
		1.7	39.6		32.8	18.1	7.8	
2007	1	2	31	1	29	16	14	94
	1.1	2.1	32.9	1.1	30.9	17	14.9	
2008	5	2	48	0	34	19	12	120
	4.2	1.7	40		28.3	15.8	10	

単位：上段は人数，下段は割合（%）
注：a 父, b 母, c 祖父母, d 兄弟姉妹, e 上記以外の親族, f 友人, g その他

④質問紙４　個人の体験や背景について

各年度の結果は表６の通りであった。質問（1）の，「自分が死の危険を感じるような経験の有無」については，表に示す通り 2005 年度でほぼ４分の１の受講者が，2004 年度と 2007 年度でも５分の１以上の受講者が「ある」と回答していた。質問（2）の「自分以外の人の死を目撃・経験の有無」については，どの年度も７割前後の受講者が「ある」と回答していた。受講者との関係は「祖父母」または両親や兄弟姉妹以外の親戚・親族が最も多く，ほぼ３～４割を占めていた（表７）。

２）ワークについて

受講者の記述内容は以下の４つの主旨に分類された。

①「**１．事実の受け止め方，その後の生き方など**」

どの年度も３～４割の受講者が記述していた。事実を受け止めることができず，動揺，混乱したり落ち込む，泣き続ける，恐怖や不安にさいなまれる，現実逃避するなどネガティブな思考や行動をとるだろうと予想する受講者と，事実を前向きに受け止めて時間を大切に過ごすことを考えたり，達成感を持って死にたいと望む受講者の数がほぼ半数ずつであった。この主旨の記述の中で最も多かったのは，「今まで通りの生活を続ける，普通に過ごす」という意見で，どの年度もほぼ４割の受講者が回答していた。

②「**２．半年間で何をしたいか**」

この項目はどの年度も一番多く，半数以上の受講者が記述していた。中でも「やり残したこと，やりたかったこと，好きなことをする」という回答が最も多かった。具体的には「旅行する，思い出の場所を訪れる，秋田を離れる」などの記述が１～２割を占めていたが，「お世話になった人や会いたい人に会いに行く，連絡を取る」「感謝の言葉や謝罪の気持ちを伝える」など，これまでの人生を振り返って，家族や親しい人たちに素直な思いを伝えたいと記述したものが多かった。この他，「手紙，日記，闘病記録，本を書く，写真を撮る，絵を描くなど思い出作りをする，生きた証を遺す」「貯金や宝物を家族に渡す」「家族や誰かのために何かしてあげたい」「恩返しをしたい」と２割近くの受講者が記述していた。また，「部屋を片付けたり身辺整理をして，処分したり遺したりする」「遺言を書く，自分の死後のことについて書いたり話したりしておく」と，自分の亡き後のことについて考えた記述もほぼ２割に達していた。また，少数ではあったが，教壇に立ちたいとの希望を書いた受講者もいた。

③「**３．人とのかかわりを中心に**」および「**４．告知・病気の治療について**」

３と４についての記述は少数ではあったが，人とのかかわりを中心に考えた記述では「最期は（または最期まで）家族や恋人など親しい人と過ごしたい」「周囲の人とのつながりや時間を大切に過ごしたい」という希望を書いた受講者が１割近く（15 ～ 20 名）いた。病気の告知や治療に関しては，毎年度 10 名程度の記述ではあったが，「家族や友人に真実を告げて，いろいろなことを話し

Akita University

たり，自分の死後のことを頼みたい」という希望と「病気のことは誰にも話さない，またはごく親しい人だけに話す」という意見がほぼ半数ずつであった。その背景には「自分の病気のことを知ることで，周囲の人の自分に対する態度が変わるのがいやだ」という気持ちがあるようだが，その一方で「周りの自分への対応が変わり，らくになると思う」という意見もあった。延命治療に関しては，希望すると回答した人と，希望しないと回答した人が，それぞれぞれ2，3名ずついた。また，確実に忍び寄る死をまつよりも自ら命を絶ってしまうかもしれないという記述もあった。「今は考えたくない」「その時にならないとわからない」と記述した学生もそれぞれの年度で数名いた。

3）リアクションペーパーについて

すべての年度を通じて，授業の一環として「死」やデス・エデュケーションを学ぶことに多数の受講者が肯定的で，「これまであまり死について考えたことがなかったので，良い機会になった」という感想が多かった。また，「このような授業をもっと早く学びたかった」，「高校や義務教育でもぜひ行うべき」との意見もあった。しかし，親族や友人，知人など身近な人を亡くした経験を持つ受講者の中には「過去の悲しい体験を思い出した」という人もいた。反対にこれまで死別をほとんど体験したことがない受講者の中には，「死に対して漠然とした恐怖や不安の念を持っているので，授業を受けるのがつらかった」などの記述が見られた。

今回調査したすべての年度を通じて，大多数の受講者は，「デス・エデュケーションを学んだことによって死に対する不安や恐怖が消失したわけではないが，これまで考えたことがなかった，あるいはふれることをあえて避けてきた「死」を徒に恐れることなく，自分自身の死，そして大切な人の死に直面した時にどのように向き合っていくかを考える機会になった。」と記述している。また，「死の教育なんて必要なんだろうかと思っていたが，死ぬこと，遺される者のことを考えることで，今をどう生きるかにつながる大切なことだと思えた。」「今回の授業を受けて，私は相変わらず死ぬことは怖い。苦しみながらも私を育てた親の苦労を思うと，絶対に死にたくないと思う。しかし死があるから真剣に生きるのだと思った。」という記述のように，死を意識することによって，時間の有限性や生きることの意味，あるいは今をどう生きるかを再考するきっかけができたのではないかと思う。

また，将来教壇に立つことを希望している受講者は，「大学生になって初めてデス・エデュケーションの授業を受けたが，生まれた時から死は必ずあるもので，デス・エデュケーションに早いも遅いもないと思う。命あるなら学ぶべき。」「実際に家族の死に直面するという機会が少なくなってきているので，死は誰にでもやって来て，死んだ人はもう生き返らないという当たり前のことがしっかりと理解できていない子供もいるのではないだろうか。デス・エデュケーションを行うことで，死について見つめなおす機会を与えることが必要だと思った。」「テレビの画面の向こうで起こっている戦争や事件は，子供たちにとっては間接的な死であり，また，ゲームの中だけの出来事で，感情に届いていないように思う。『死んでもまた生き返る』と信じている子どもたちが増えていく中で，「命はリセットできない」ということをどのような形で理解してもらえるだろうか。」「自分が教壇に立っている時，生徒で身近な人を亡くしてしまった子がいたならば，自分はその子に対してどのような援助をすればよいのか考えさせられた。」「学校ではいじめにより自殺したり，大きな事件を起こしてしまった生徒がいる。デス・エデュケーションを学校で行うことで死について考え，自殺をしようとする生徒を止められるかもしれない。このような生徒たちに死を考えてもらい，生きることについて学んでほしいと思った。」「今回学んだことを活かして，『死といじめ』を合わせて考えさせ，そうすることでいじめの醜さを学ばせたいと思う。」「将来教師になったら，子どもたちに死についてどのように学んでもらうかをきちんと考え，役に立つ授業をしたいと思う。そして，その授業を通して周りの人にやさしく接することができるようになってほしいと思う。」など，幼いうちから死について学ばせることに関する意見や，将来自分の生徒が死を体験した場合の対応に関しての不安，そして自らが生徒に死を教える立場になった場合の心構えや覚悟などを記述していた。

Akita University

Ⅴ．考察

１）質問紙の結果から

2004 年度から 2008 年度の５年間で，死について，あるいはデス・エデュケーションに関して受講者の反応や態度に大きな差異は認められなかった。どの年度も質問紙への記入は，デス・エデュケーションの講義の前に実施しているため，授業の内容が受講者の反応に影響を及ぼしていることはなさそうである。

2005 年度第１回目の授業のみが 12 月の冬休み直前に行われており，同年度第２回目の授業とその他の年度の授業はすべて１月に行われていたが，他年度との違いは特に認められなかった。したがって年末年始特有の社会の動きや，公共放送およびマスコミを通じての一年の出来事の振り返りあるいは新年や将来への展望などが，「死」に対するイメージや不安感に影響を及ぼすとは考えにくい。これまでのところ社会情勢や季節の変化といった観点から死生観に及ぼす影響を調査した研究も行われていないようである。しかし，国内でもとりわけ日照時間の少ない本県では，一年の間で昼が最も短く夜が最も長くなる冬至を迎える 12 月下旬という天候や時期が，デス・エデュケーションの受講者の気持ちに影響を及ぼす一因となりうるのではないかとの疑問は残る。また，季節性情動障害（Seasonal Affective Disorder; SAD）という，ある季節にのみ体のだるさや疲れやすさ，気分の落ち込みなど，うつ病に似た症状が出る脳機能障害の一種があり，これは 10 ～ 11 月ごろに憂うつな気分が始まり，２～３月ごろに治まるというサイクルを繰り返す冬型が多いと言われている。こういった季節に関わる精神疾患などとの関連性も含めて調査を進めることは，本県の年間の自殺率が平成７年以降全国１位となっている状況からの脱却を推進する一助ともなるのではないかと考える。

調査を行ったすべての年度の出来事を大まかに振り返ってみると，国外ではテロによる無差別攻撃が後を絶たず，国際間に緊張が続いている。そして国内外ともに，常に地震，津波や台風（ハリケーン）などの自然災害に見舞われ，毎年多くの犠牲者が出ている。また国内では，いじめが原因と見られる児童・生徒の自殺や，小さな子供が命を狙われる事件，無差別の凶悪な犯罪事件などが毎年のように発生している。こういった社会情勢や自然災害による被害の状況を，テレビや新聞などマスコミの報道あるいはインターネットの動画などを通じて見たり聞いたりすることが，質問紙の結果に影響を与えることはなかったと推測される。一方，2011 年３月 11 日に発生した東日本大震災のように，受講者のほとんどが直接大きな揺れと物心面，精神面などすべてにおいて影響を受けることとなった体験はどうであろうか。これについては，2009 年度以降大震災前後までの調査を基に改めて報告したい。（社会情勢が死生観にどのような影響を与えるのかは大変興味ある課題であるが，本稿の範囲を超える。なお参考のために，本調査を行った年度に起こった出来事を付録に掲載した。）

２）ワークについて

回答の中には，「今を生きることに精いっぱいで，いつのことかわからないことを考える心の余裕がない」と記述していた受講者もいたが，多くは「身近な死を経験したことがなく，未知のものに対する不安あるいは恐怖がある」という気持ちが大きいのではないかと考えられる。これらの回答も含め，それぞれの受講者が自分自身もいつかは死を迎える存在であることを改めて認識し，これまでの人生を振り返りながら，限りある時間をどのように過ごしていくかについて一考する機会を持つことができたのではないかと思う。

３）リアクションペーパーについて

授業を行うにあたり受講者には，死という重いテーマを扱うため，気分が落ち込んだり不安になったり，いつもと違う気持ちになったりすることがあるかもしれないことを事前に話し，そのような状態を自覚した際には，独自に解決しようとしないで遠慮なく申し出て十分なケアを受けるようにと伝えた。これまでにケアを希望する受講者はいなかったが，感想には「死について学ぶことに始めは抵抗を感じたり，何となく不安で暗い気持ちになったりしたが，だからと言って死について考えることを避けずに，自分の死，大切な人の死について考えていきたい。そのことで生き方や周囲の人に対する接し方を見つめなおすことができればいいと思う」「今まで一人で死について考

Akita University

えていたのと比べると，気持ちは少しらくになった」「死というものをただ暗いイメージだけでとらえるという今までの考え方だけでなく，様々な視点から考えられるようになれたのはいい機会だった」「大切な人を亡くした時，自分はどうなるのか，また，大切な人を亡くした人に自分はどう対応すればよいのか。授業の内容はあくまでも説であったり，必ずしも全員にあてはまるものではないと思うが，デス・エデュケーションで得た知識を基に自分なりの答えを探したいと思った」「死は自分自身の問題であり，他の人のことや自分の死後のことなど無関係だと思っていた。だから死について学ぶことは無意味だと感じていたが，それでは自分自身はもとより，遺す家族や友だち，周囲の人への配慮があまりにも足りなかったことに気づいた。」「これまで自分はいつ死んでも全然悔いはない，この世には何の未練もないと思っていた。しかしそれでは本人はいいかもしれないが，『遺された者の悲しみ』を全く考えていないということを痛感した」などの記述が寄せられた。

自分自身の死，あるいは愛する者の死を考えることは決して安易にできることではない。決まった答えがでるわけでもなく，正解があるわけでもない。考えることの重さ，厳しさから逃れることも，避けることも，止めることも，あるいは曖昧にさせてしまうことも可能ではある。しかし敢えて自らの思いと向き合いながら，自分自身の死，愛する者の死，そして第三者の死について考えることによって，改めてそれぞれの人生観，死生観を発見あるいは認識できたのではないかと推察される。

Ⅵ. 全体考察

デス・エデュケーションを受講しての感想では年度によって大きな違いは見られなかったが，デス・エデュケーションの授業を始めて２年目の2004年度と，６年目を迎えた2008年度の受講者の記述を比較してみると，死に対する意識には若干の違いがあるように思われた。

その一つは，デス・エデュケーションを大学の授業の中で行うことに対しての抵抗感である。どの年度も大半が肯定的，受容的ではあったが，2004年度の受講者の中には「死について考える機会があったのは貴重な経験であったが，教育として行うことに行きすぎではないかと思う気持ちもある」「より多くの人にデス・エデュケーションを知ってもらいたいと思う反面，多くの人がいるこの授業でデス・エデュケーションを扱うことは望ましくない気がする。もっと少人数で，事前にこのような授業をやってもよいかなどのアンケートを取る余地はあった気がする（それか，フォローではなく授業の拒否など）」との意見があった。これに対して，「子どもたちの中には，死というものがわからず『死んでも生き返る』と本気で信じている子もいる。ゲームや漫画の影響とも思われるが，冗談ではなく本気で言っている子供の顔を見ていると危険を感じる。このような時代だからこそデス・エデュケーションが必要なのだろうと思った」「日本でもっとデス・エデュケーションが広く浸透していたら，犯罪などにも良い方向に影響が出てくるのではないだろうか」という記述もあった。一方，2008年度の受講者の感想では，デス・エデュケーションを大学の授業で行うことに対する反対意見や抵抗感を示す記述は見られなかった。2004年度よりも2008年度の記述で多く見られたのが，社会で無差別的に起こる事件や犯罪，いじめが原因と思われる生徒・児童の自殺に関するニュースおよびドキュメンタリーや，重い病で余命宣告を受けた人々をテーマとしたドラマや映画に関する記述であった。この傾向は，年を経るごとに「死」に関する，あるいは「いのち」をテーマとした報道番組や作品に触れることが多くなり，それに伴って「デス・エデュケーション」という言葉にはなじみがなくとも，その概念や目的，必要性などが自然に受容されつつあることを示唆しているのではないかと考えられる。「死」に対する不安や恐怖心が薄れたり消失したわけではないが，身近なテーマとして日常的に取り扱われるようになってきたことで，長い間「死」について考えたり話したりすることはタブーとされてきた状況が，ようやく自由に積極的に「死」というものを学び，理解し，それぞれの見解や意義を見出すことを可とする時代を迎えたと言えるのではないだろうか。

Ⅶ. これからのデス・エデュケーション

科学や医学においては，健康寿命（日常的に介護を必要としないで自立した生活ができる生存期

Akita University

間）の伸長や，不治の病や難病の治療，そして遺伝子レベルでの診断と予防，アンチエイジング対策など，健康で長生きするための方法や手段の開発が次々と進み，実践されている。新薬や医療技術の開発で多くの難しい病気の治療が可能になっている一方で，原因の究明や治療方法，予防への取り組みが急がれる病気もまだまだ多く，新型ウィルスや病原菌による未知の病気の出現もあり，世の中がどれだけ進歩しても私たちは死を意識せずに生きていくことはできない。

また，情報ツールの進化やインターネットを始めとするコミュニケーション手段の無限の広がりによって，世界中のあらゆる情報を即座に入手したり，国籍も性別も年代も違う様々な人々とリアルタイムで交信したりすることが可能となり，国際的な交流が進む一方で，実際に起きている世の中の現状が，バーチャルリアリティやネットゲームの中で起きているような，現実感を伴わない事象として受け流されているという危険をはらんでいるようにも思われる。

こうした背景を受けて，今後さらに多くの分野や視点から，生命や死に関する研究が行われることが期待される。

しかし一方でデス・エデュケーションを学ぶ大学生の多くが身近な死を体験していないため，それを教える側に立った時に不安や迷いが生じるであろうことは容易に想像がつく。たとえ身近な死を体験している人であっても，一人一人の体験や心情は異なるものであるから，多面性を持つ死というものをどのような視点から，あるいはどの側面，どの分野に着目して伝えていくのかは教える側の判断に委ねられることが多いと考えられる。

今後は，デス・エデュケーションを学ぶことによってそれぞれの受講者が自らの死生観，人生観を構築する手がかりの一つとなることを目指すとともに，「子どもたちに死を教える人を育てるデス・エデュケーション」をも念頭に置きながら，さらに多くの理論や観点，新たな情報などを伝えていくことが必要であることを実感している。

Ⅷ. 引用文献

Conte, H.R., Weiner, M.B., & Plutchik, R. (1982). Measuring death anxiety: Conceptual psychometric and factor analytic aspects. *Journal of Personality and Social Psychology, 43*, pp. 775-785.

Gesser, G., Wong, P.T.P., & Reker, G.T. (1987-88). Death attitudes across the life-span: The development and validation of the death attitude profile (DAP). *Omega, 18(2)*, pp. 113-128

Knight, K.H. & Elfenbein, M.H.(1993). Relationship of death education to the anxiety, fear, and meaning associated with death. *Death Studies. 17*, pp.411-425

Ⅸ. 参考文献

デーケン, アルフォンス　(1986)：「死を教える〈叢書〉死への準備教育，第１巻」メヂカルフレンド社

デーケン，アルフォンス (1986)：「死を考える〈叢書〉死への準備教育　第３巻」メヂカルフレンド社

デーケン，アルフォンス (1995)：「死への準備教育―潔く死ぬために―〈臨死学〉入門」春秋社

Kalish, R.A.(1985): *Death, grief, and caring relationships (2nd ed.)*. Monterey, CA: Brooks/Cole.

上岡澄子 (1997)：「我が国におけるデス・エデュケーションの動向と課題―人間形成論的考察，佛教大学大学院紀要，25 号，93-108.

神奈川新聞報道部　(2005)：「いのちの授業―がんと闘った大瀬校長の六年間」，新潮社

中井文子 (2010)：「アメリカにおけるデス・エデュケーションの近年の動向―1986 年から 2000 年代にかけての鎮静化と分化の傾向について」早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊，18 号，１，237-248.

ニーメヤー，ロバート・A. (2006)：「〈大切なもの〉を失ったあなたに」，春秋社

大瀬敏明 (2004)：「輝け！いのちの授業」，小学館

渡部明子 (2000)：「デス・エデュケーションと死に対する不安の増減との関係」武蔵野女子大学大学院人間社会文化研究科　修士論文。

渡部明子，森和彦 (2003)：「大学生を対象としたデス・エデュケーションの実施とその問題点について」『秋田大学臨床心理研究』，第３巻，11-28.

Akita University

付録

2004 年度から 2008 年度にかけて起こった出来事のうち学生の死生観に影響を与えた可能性のある出来事（person.sakura.ne.jp/year/2004 ～ 2008.html および，222.151.247.58/info/2004 ～ 2008.html を参照）。

2004 年：１月山口県内の養鶏場で鳥インフルエンザ発生，大分県，京都府などでも発生。３月マドリードで列車同時爆破テロ発生，約 200 人死亡。４月イラクで日本人人質事件発生。５月イラクで日本人ジャーナリスト襲撃事件。６月小学６年の女児が同級生殺害。10 月台風 23 号が上陸，死者･行方不明者 98 人。同年，観測史上最多の 10 個の台風が上陸。新潟中越地震（M6.8）発生。12 月スマトラ島沖地震発生（M9.3），巨大津波が押し寄せ，死者・行方不明者 20 万人以上。

2005 年：２月大阪府寝屋川市の小学校で卒業生の 17 歳少年が教職員３人を包丁で切りつけ１人死亡。４月 JR 福知山線脱線事故。車両が線路脇のマンションに激突，運転手１人，乗客 106 人が死亡。 ５月学校行事中の高校生の列に飲酒運転の車が突っ込み，生徒３人が死亡。６月アスベストによる健康被害公表。７月ロンドンで同時爆破テロ発生，56 人死亡。エジプトで同時多発テロ発生, 88 人死亡。８月大型ハリケーン米国に２度上陸，ニューオーリンズを中心に大被害。死者・行方不明者約 1900 人。11 月広島県広島市で帰宅途中の女子児童がペルー人によって強制わいせつの上殺害さる。北海道苫小牧市の小・中学校のガラスが割られる。中一男子２名が器物損壊容疑で報道。埼玉県熊谷市の小学校でウサギが襲われる事件３件発生。12 月栃木県今市市の小学１年生の女児が下校途中に行方不明，翌日遺体で発見された。神戸市長田区の高校に 31 歳の男が侵入。生徒は試験中で無事。「JR 羽越線脱線事故（JR 羽越線特急脱線転覆事故）」山形県庄内町で特急いなほ 14 号突風にあおられ脱線，転覆した車両がブロック製の小屋に突っ込む。死者５人，重軽傷者 32 人。

2006 年：１月アメリカから輸入した牛肉に BSE 危険部位が混入していたことが判明，政府が米国産牛肉の輸入を再び全面禁止。５月ジャワ島中部で地震発生（M6.3), 6000 人が死亡。福岡県の中２男子生徒や岐阜県の中２女子生徒が自殺。いじめが原因とみられる。11 月イラク高等法廷がフセイン元大統領に死刑判決を下し，12 月 26 日に死刑が確定，同月 30 日に執行。

2007 年：１月不二家が消費期限切れ材料を使用していたことが判明，洋菓子製品の製造販売を休止。後各地で食品の偽装が次々と判明。４月社会保険庁の調査で，厚生年金・国民年金の保険料に関して，不明の記録が約 5000 万件あることが判明。７月新潟県中越沖地震（M6.8），新潟県内で死者 15 名。柏崎刈羽原子力発電所で火災発生，原子炉の運転中止。

2008 年：５月ミャンマーを大型サイクロン直撃，死者・行方不明者は 13 万人。中国四川省で大地震（M8.0）。死者･行方不明者９万人以上。６月岩手・宮城内陸地震（M7.2），死者・行方不明者は 23 人。秋葉原で元派遣社員の 20 代の男が歩行者らを襲撃，７人を殺害，10 人に重軽傷を負わせた。８月アフガニスタンでボランティア活動をしていた日本人が誘拐・射殺される。10 月大阪で無職 40 代の男が個室ビデオ店に放火，客 15 人死亡。